

小説同人誌評 34

今回は『文の鳥』

を推したい

細見和之

世の中の動きは予測不可能である。ロシアのウクライナ侵攻が止まないまま、今度は安倍元首相の暗殺である。しかもそこから、旧統一教会と自民党を中心とした国会議員の深い癒着という問題があぶりだされることになった。旧統一教会が霊感商法などで社会問題となったのは、一九八〇年代前半、ちょうど私の学生時代で、学内に浸透していた統一教会メンバーはいちばん分かりやすい敵だった。彼ら、彼女らが関西の某私大で集会を行うという知らせがあったときには、阻止するため何人かで泊り込みに出かけた。こちらの様子を探してか、統一教会のメンバーは姿を見せず、集会は学内では実施されなかったのだが、生協の二階の廊下、ペランダに段ボールを敷いて、それを布団代わりにして寝たことを思い出す。その夜には、念入りなことに、武闘訓練なるものまでやらされたのだ。さて、今回読んだなかで同人誌としてい

ばん充実している印象だったのは、『文の鳥』第4号。メンバーも増えて二五〇ページの厚みに達している。すべて紹介したいところだが、ここでは、とくに深い感銘を受けた三作をあげておく。

同誌掲載の河内隆雨「鬼の酒」は、四〇〇字詰め換算九〇枚弱の、独自の民話を下敷きにした見事な作品に仕上がっている。

大学で限界集落、消滅集落の研究をしている神坂（かぐさか）幹児のもとへ不意に調査依頼が届く。依頼は学生時代のゼミの先輩からで、先輩の故郷の神坂（かみさか）集落と呼ばれた廃墟址を調査してほしいという。その集落はいったん「発見」されながら、その後、消滅していった。その「発見」を伝える大正八年の新聞記事には「神坂まつ」という名の、当時七〇歳だった女性の写真が掲載されている。調査の過程では、二〇体の嬰兒の遺骨が掘り出されたりもする…。

こういう込み入った背景に、その集落にまつわる地元の魅力的な民話や伝承が重ねられ、さらにその民話・伝承についての二転三転する解釈が加えられてゆく。神坂（かぐさか）と神坂（かみさか）という名前の類似については示唆にとどまっているのだが、こんな複雑な物語をひょうひょうと綴ってゆく作者の力量に、いつもながら私は大いに感心してしまつた。

同誌掲載の風和「土に還る」も印象深い作品。こちらは四〇〇字詰め換算六三枚ぐらい。主人公の玄三（蒔田玄三）は四三歳。五人きょうだいの三番目で、兄、姉、妹らと較べて影の薄い状態で育つた。父親の死に際しても危うく連絡を忘れられかけるような関係。いまは勤めていた工場を解雇され、住み場所も失って、野宿をしたりしている。やがて玄三は山のなかに段ボールなどで小屋を作り、そこで暮らすようになる。

ここから、長兄の死をきっかけに亡くなった父親が玄三のことを気にかけていたことなどが明らかになるのだが、とにかく山での暮らしを始める玄三の姿が生き生きと描かれていて、私は作者の言葉に引き込まれていたのだった。

同誌掲載の神保メイ「ツキヨミ」は、精神病院を舞台とした、四〇〇字詰め換算一六〇枚近くになる作品。一四歳の女の子・星野ヒカルと看護師・白神マリアの視点で交互に描かれてゆく。

プロローグではヒカルが「ツキヨミ」という神の子を宿す儀式がファンタジー的に描かれているが、以降は、ヒカルの母・アカリ、長いあいだ病棟にいる高原テルコラのトラウマを背負った姿が描かれ、最終的にヒカルを解離性同一性障害に追いやった体験が明かされている。母と娘に対して反復されたレイプ

が決定的な要因とされているが、同時に初潮期を越えて成長してゆく困難さの物語でもありと受けとめた。

作者は同誌に掲載されている掌編「月と共に」で、月に一度やって来る「生理」の煩わしさを綴る一方でこう記している。

満ちては欠け、欠けてはまた満ちる。女が、月と共にそんな死と再生を繰り返していることを男は知るまい。

この作品の大事な背景であるに違いない。「私人（しじん）」第107号は七八ページと薄めだが、充実している（以下、枚数計算は煩雑なので必要な場合のみ記す）。

同誌掲載のえひらかんじ「三日月の下」は、内科の医師・曾根哲夫を主人公とする物語。

作者は以前の作品で同じ主人公が医師をやめ海辺の町で小説を書く姿を描いていた。この作品では、同じ主人公が危機に瀕した小さな病院の院長となってその再建に努める一方、小説の第二作を書こうとしている…。

現実の動きがその小説に影響をおよぼし、また小説の展開が現実の哲夫に影響を与える。もちろん、その「現実」それ自体が小説のなかのことなのだから、ここには奇妙な作品空間が生じていることになる。後半では哲夫の古い知り合いが登場して現在の医療を滔々と

批判する。これからこの連作はどう展開してゆくのだろうか。

同誌掲載の杉崇志「お腹が空いた」は、一見平凡な男が家庭内DVの果てに五歳の息子を殺害するにいたる姿を描いた、四〇〇字詰め換算一〇〇枚を超える作品。

主人公の原田光男は息子が一歳になったころ、職場で営業部の販売担当から倉庫係へと異動を命じられる。光男が仕事でミスを連発した結果だった。そこから作品は、光男の生い立ちを振り返る。光男が小学校四年のとき父が脳溢血で倒れ、その後四年間半身不随で過ごしたのち死去する。その間、暴君と化した父に母はきわめて従順で、生活は父の入っていた高額の保険によって賄われた…。

この父および母に対する光男の関係が後半のDVの伏線になっているはずなのだが、そのあたりの流れがいまひとつ不明確。父が母にあたりちらす前兆となる「腹がへったな」という言葉と、殺される直前に光男の息子が呟く「お腹が空いた」という言葉にも結びつきがあるはずだが、その点も私には掴めないままだ。

ともあれ、うだつのあがらなかつた光男が家庭内でDVを振るいはじめたとたん職場で深刺しとはじめる姿には、うすら寒いリアリティがある。

「m.o.n」第19号掲載の松嶋涼「落下する

球体」は、幸せな社内結婚をしたはずの夫婦が、五年で冷え冷えとした関係に陥っている姿を、夫である「僕」と妻である「わたし」の視点で交互に描いている。

「僕」は朝食のとき妻がフォークの下に敷いていた紙ナフキンを丸めてマンシヨンの小窓から投げ捨てて、それを妻に厳しく見咎められる。「俺」は職場では上司に嫌われていて仕事も減らされている。どちらにも居場所がない。くわえて母を半年前に亡くしていた。一方「わたし」は自宅で設計の仕事をしていて、夫と真剣な話は交わさなくなっていた。

「里沙〔妻の名〕にはまだわからないよね」という夫の言葉に苛立ちを覚えるばかりだった。そして、「わたし」は夫が繰り返して投げ捨てていたナフキンを拾ってきて夫の食卓に置く。酔っぱらって帰ってきた「僕」は怒りに駆られて、妻が大事に育てていた鉢植えを窓の外に投げ捨てる…。

テレビの無差別殺傷事件の報道などについて、夫婦の意見が噛みあわず、互いの言葉がささくれてゆくところなど、リアリティがあるなと感じた。

同誌掲載の内藤万博「ポーターユニーク」は、コロナ・ウイルス禍を逆手にとった、四〇〇字詰め換算一二〇枚を超える作品。

ある日「俺」のところに朝五時、不意に警察官がやって来る。「俺」はパニック状態に陥

るが、警察官の目的は同居している母だった。「俺」の母親はその場で、逮捕されてゆく。母は病院の清掃スタッフとして仕事をしていた、コロナ・ワクチンを保存している冷凍庫の電源を意図的に抜いて、五千回分のワクチンを使用不可能にしたのだった。一方、「俺」が警察官の登場でパニックに陥ったのは、二階の自室の押入れで大麻を栽培していたからだった。二七歳で専門学校に通っている「俺」は専門学校生を隠れ蓑に、大麻の製造販売人を数年続けている身なのだ。

拘留中の母に面会にやって来た二人の女性をつうじて、母が宗方慧（むなかたさと）という医学博士の集りに参加していたことを「俺」は知る。宗方は利益至上主義的な医療制度を批判し、コロナのワクチン接種にも反対を唱えていた。夫を癌で亡くした母は、現在の癌治療にも反対の宗方の主張に強く共感して、宗方の唯一勤める「スハルジクチン」なる薬剤を常用していたようなのだ。

「俺」は母親と宗方一派をめぐる関係を胡散臭く見る一方、自分の大麻製造販売の痕跡を抹消すべく努める。母は確かにここ数年体調をよくしていたが「俺」の考えるところでは、それはスハルジクチンのおかげではなく、「俺」が秘かに母の食事に少量の大麻を混入させていたからだのだ。

ワクチンをめぐって賛成・反対の種々の議

論があるなか、作者は「大麻」という素材でそういう状況に距離を取ろうとしているようだ。タイトルの「ボーダーユニーク」は大麻そのものよりも、そういう状況のなかで、ひとりひとりが置かれているきわどい位置を名指しているのかもしれない。

『文宴』第137号は、巻頭の藤原伸久と巻末の中田重頭の商品によって、重厚な一冊となっている。

藤原伸久「星ひとつ」は、いつものとおり「私」とか「僕」という人称は登場しないが、基本的に主人公・須藤啓介の一人称小説。四〇〇字詰め換算で一二〇枚近くの作品。

冒頭、四三歳の主人公に不意にメールが届くところからはじまる。二〇年以上まえに亡くなった瀬尾ひかりからのものとしか思えないメールだ。二人しか知らないはずのことが記されている。

須藤は二〇歳のとき、登山での滑落で大怪我をし、入院した先でひかりと出会った。ひかりはその病院の看護師で、同時に本格的な登山の経験者だった。退院後、須藤は彼女に導かれるようにして登山を重ねる。須藤の父は登山用品を中心とした大きなスポーツ店の経営者だったが、須藤は父には反発を感じていた。ある日、ひかりをモデルにした父の店のポスターが制作され、それに須藤は強く怒る。ひかりは須藤と冷静に向き合うためにひ

とりに山に登り、落石にあって死んでしまう。メールはひかりの姉の娘がひかりの日記を読んで須藤に送っていたものと判明するが、そのメール送信の動機がもうすこし書かれてあればと思う。とはいえ、作者はしばしば魅力的な女性を描き出す。「瀬尾ひかり」という女性の造形もさすがだと思った。

一方、中田重頭「悪名の女」も魅力的な女性を提示している。四〇〇字詰め換算八〇枚を超えるだけの分量だが、そこに一二歳のときの満州引き揚げ体験から八八歳の現在まで、ひとりの女性の人生が深く刻みこまれている。

育代という老婆を主人公とする三人称小説だが、本質的には育代の身世打鈴（シンセタリヨン）である。彼女の人生体験の原点となったのは、満蒙開拓団として家族で渡り、日本の敗戦後、ソ連軍が包囲して「女狩り」をはじめたことである。自警団長だった父は自分の妻もふくめてソ連兵に女性を差し出し、「匪賊」から団員を守ってもらう。育代の兄は母を守るためにソ連兵に手製の槍で飛びかかり射殺される。父は女たちが陵辱される光景を育代の目から上着で隠しながら「何でもないことだ。こんなことは何でもないことだ」と言う。

満州から引き揚げることができたのは、家族のなかで父と育代だけだった。育代は戦後、山で木の伐採をする男たちに食事を作る「カ

シキ」の仕事をしたたりしながら、さまざまな男をいわば渡り歩く(「カシキ」自体、娼婦というあり方も果たしていたとされている)。逆に言うと、男たちは途方もない不幸を抱えた育代の生活をそれなりに支えてきたのである。その象徴がいまは作家として身を立っている紀野達哉。彼は若いときの山仕事で「カシキ」をしていた育代と出会い、彼女には指一本触れないまま、彼女の清らかな姿を作品に書き込んでいたのだった…。

私が記すのはおこがましいことだが、これは私がこれまで読んできた作者の作品でいちばん充実した一篇であり、今回読んだ同人誌のなかで文句なしに傑出した作品だった。

『八月の群れ』第74号掲載の小柳きしえ「時代と女」は、日本の敗戦後、女性の生きる姿をとくに米兵との関係から力強く描いた、四百字詰め換算で一四〇枚近くになる力作。

時代設定は一九六〇年前後だろうか、主人公の「奈江」はようやく高校受験を済ませたところで、嫉けに厳しい母から大学への進学を言われ、閉口する。奈江は英語を勉強してアメリカへ行ってみたいと思うものの、大学受験などまだまだ考えられないのだ。そんなとき、あてもなく路面電車に乗って、米軍基地の近くに降り立ち、外国人と思える二人の女の子と出会い、その子たちに連れられて母親らしき「チャヤ子(千恵子)」のもとへ行く。

チャヤ子は日本人で米軍基地で仕事をしている。そこから、チャヤ子に導かれて、奈江の米軍基地体験がはじまる。

初めて食べるハンバーガー、初めて飲むココラ。やがてチャヤ子は奈江を夜のバンド演奏に誘い、奈江はタイムという若い米兵と知り合う。映画スターのようにハンサムなタイムは奈江をいきなりダンスに誘う。奈江はカタコトの英語でタイムと会話しながら、実用英語の必要性も痛感する。

奈江には同級生の友人・真理がいる。真理は高校の最初の学力テストでトップになるような優秀な生徒だが、実用的な英語の必要性を奈江と共有していて、米軍基地への関心も強い。すぐに二人して米軍基地を訪れるようになるが、まもなく真理は別々に基地へ行くことを提案する。しばらくして、奈江は真理が高校を退学したことを知る…。

後半、チャヤ子は自分の生い立ち、二人の女の子との関係などを、つぶさに奈江に語る。奈江を米軍基地に引き込んだ立場にあるチャヤ子だが、彼女は米軍基地をつうじて新しい世界を奈江に教えつつ、米軍基地の危険からは奈江を守りたかったのだ。

高校生の奈江を鏡のようにして「チャヤ子」という魅力的な女性を描いた作者の力量は優れている。今回読んだなかで、さきに紹介した中田重顕の作品に次ぐ快作である。

『あるかいど』第72号掲載の切塗よしを「面会時間 (Visiting Hours)」は切ない物語。

主人公の「わたし」は五三歳。市役所に勤めていて、脳溢血で倒れ、いまは市役所職員のまま駐輪場の管理人をあてがわれている。病気の後遺症で、記憶に欠損があつて、大事な約束を忘れていく気がする。独身の「わたし」は退院後は妹夫婦のもとで暮らしている。あるとき妹からその約束の相手は「炭谷さん」ではないかと言われる。「わたし」の元の職場で部下だった「炭谷あかり」のことだ。さらに、結婚を目前に控えていた炭谷が「わたし」の病床に六日間も通い詰めたことを妹から告げられる。「わたし」はその結婚式に祝電を打つ約束をしていたのだ。

人間ドックで病院を訪れたおり「わたし」は炭谷あかりと遭遇する。彼女はわずか三ヶ月で離婚し、いまは死に至るような重い病気で入院中の身だった。「わたし」は妹夫婦の家を出て、あかりと一緒に暮らすことを考える。あかりも「わたし」と暮らすことに同意し、やがて二人は入籍する…。

タイトルの「面会時間 (Visiting Hours)」はいわば天国の面会時間。作中に何度か「わたし」が天国へ面会に出かける場面が挿入されているのだが、その都度「わたし」はあかりの名前を忘れていたり、面会の理由を思いつけ

なかったりして「面会」はかなわない。二人はむしろ来世など存在しないということ得意気投合していたのだが、やはりぎりぎりのところ私たちには来世が必要なのだ。

なお、同誌には、昨年一二月に亡くなった高島寛の追悼特集が組み込まれている。

「別冊關學文藝」第64号では一葉英一「銀色の遠景 萩子」を味わい深く読んだ。

五七歳の「私」は「萩子」というすこし年下の女性と有馬温泉に向かつて電車に揺られている。「私」は萩子が働いているクリーニング店で彼女と出会った。預けたスーツに映画のチケットの半券が残っていて、そこからときおり彼女と映画を話題にすることになり、二カ月後には好きな映画へ一緒に出かけ、食事も行う仲になる。お互いに離婚歴があり、いまはともにひとり身。そこで「私」は思い切つて温泉旅行を彼女に持ちかけたのである。乳癌の手術も受けたという彼女はとりあえず同意してくれたのだが…。

その恋の顛末を描くことで、初老の男女の心の機微が、古風と呼べるほどに端正な文章で、丁寧に、また淡々と記述されている。

「たまゆら」第123号掲載の佐々木国広「織物語(きぬがさものがたり)」も年長者の不思議な恋を描いている。

「私」は「女色」の道楽で妻を早くに亡くした身。いまは五個荘築瀬(滋賀県近江市)

で竹製品の下請けをしながら、散歩を大事な気晴らしとしている。あるとき、安福寺の金堂の地獄絵図のままで倒れる女性を見かける。「私」はペットボトルの水を与える。そのときから、その女性の姿が「私」のなかに居座るようになる。

「私」は偶然、彼女が働いている喫茶店に入り、彼女と言葉を交わし「瑠奈」という名前を知る。さらにその喫茶店に通ううちに「私」はますます彼女の魅力に取り付かれる。彼女は「私」の竹細工を気に入ってくれるが、いわば付かず離れず、「自分は罪作りな女なので…」などと語る…。

瑠奈は「織山」の精そのもののような印象。こういう女性を幻のように浮かび上がらせるのは、作者の才筆としか言いようがない。

今回、『V I K I N G』は第85号と858号が届いており、そこに内田謙二「哀れな喜劇(5)」と「哀れな喜劇(6・完)」が掲載されている。じつに半年、六号に渡つて同誌の大半の頁を占めてきた作品が完結したのだ。

この「(5)」と「(6・完)」の部分はやはり、主人公・筑紫がかつて勤務していたM&Sから起こされた民事訴訟の経過が大半を占めているが、以前よりも読みやすくなっている印象がある。民事訴訟の一番は敗訴となるが、新たにカサブランカという名の女性弁護士が登場し彼女の尽力によって、筑紫は新た

な闘争心を呼び起こされる。妻のミッシェールは二度の流産をへて、出産に成功する。生まれたのは男児で「東馬」と名づけられる。

ただし、勝訴の予感を抱かせながらも、最終的な結果は作品のなかでは宙吊りにされている。おそらくそこには、たとえこの裁判に勝訴してもそれは一つの過程に過ぎず、筑紫の共和国における共和国との闘いは終わりが無い、という作者の強い主張が込められているだろう。

ともあれ、これだけの大作を連載し完結にまでもたらした作者と編集部には、ささやかなエールを送りたい。

『半月 すおうおおしま』第10号+2号掲載の、瀬戸みゆう「恐ろしい肖像画」は、地方での代々に渡る情念のありかを、一枚の肖像画のうちに鮮やかに浮かび上がらせている。同誌掲載の、同じく瀬戸みゆう「チヨロのしわざ」と「ガン宣告」もまったく異なった文体と作風で読ませる。また、同誌には銚雅代の遺稿「オクラの棘3」が掲載されている。

元来「半月」は銚と瀬戸の「二人誌」だったが、それが前回から銚の『半月 よどがわ』と瀬戸の『半月 すおうおおしま』のそれぞれ「一人誌」としての刊行となった。互いの体調とペースを大切にしようとしたことだったようだ。しかし、残念なことに、今年の二月二日、銚雅代が亡くなったのである。